

日本ロレンス協会ニューズレター No. 45

2023年9月2日

日本ロレンス協会 会長 石原 浩澄
副会長 木下 誠

「記録的猛暑」「連続猛暑日」等々の言葉をよく耳にした今年の夏もようやく終わりを迎え、会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

ここに本年2回目のニューズレターを配信し、去る6月に開催されました今年度の全国大会に関する情報を中心にご報告させていただきます。

さて、今年度の大会は「コロナ禍」以降はじめての（オンラインZoomも併用しつつ）対面での開催となりました。「来年は高知でお会いしましょう」の合言葉を幾度となく繰り返してきましたが、ついに6月17日（土）、高知県立大学にて集うことができました。会場校である高知県立大学の三浦 要一文化学部長からご挨拶をいただき、第54回大会はスタートいたしました。

まずは研究発表です。最初の登壇者である古城 輝樹氏は、「Posthuman Bildungsroman としての *Sons and Lovers* —— 芸術家と星の影響をめぐって」と題して、芸術家 Paul、女性との関係、Bildungsroman（教養小説）という形式、といった従来からの論点に、星のメタファー、そしてポスト・ヒューマンなどの新たな視角からアプローチを行なうという野心的な *Sons and Lovers* 論を展開されました。続いて、「ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を「バイオフィクション」として読む」と題した発表で星 久美子氏は、(モダニスト) 作家の伝記を素材とした「バイオフィクション」というジャンルへとわれわれの関心を喚起し、ロレンスをその素材としたヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』という作品について論じられました。ダンモアが fact と fiction をいかに融合しているかを論じつつ、ダンモアが示そうとした世界観に迫るという発表でした。

短時間の休憩をはさんで、シンポジウムが開催されました。福西 由実子氏が講師兼司会を務められ、講師・パネリストとして加藤 彩雪氏、大山 美代氏が加わり、「1900-30年代のモダニズム雑誌と越境者たち」と題して、講師個々の発表ならびに討論が行われました。加藤氏は南アフリカ出身の作家 Beatrice Hastings の主に *The New Age* における文筆活動に焦点を当て、多くのペンネームを使い分けることなどで誌上での対話を促し、議論の空間としての“Public Sphere”を創造しようとしたという興味深い論を展開されました。大山氏は、20年代前期にアメリカを中心に活動したオランダ人作家・詩人である Emmy Veronica Sanders を取り上げ、具体的な詩作品を紹介しながら、詩人の特徴を論じつつ、詩人の雑誌メディアに関する態度・姿勢についても議論されました。これまであまり知られていない作家に光を当てる刺激的な発表でした。シンポジウムの舵を取っていただいた福西氏の発表

では、Stefan Lorant、Lazlo Moholy-Nagy というユダヤ系ジャーナリストたちの視覚メディアを通じた活動が紹介され、20 世紀初頭のモダニズムや雑誌メディアを見るもう一つ別の視点が提供されました。福西氏が指摘されたように、シンポジウム全体を通じてロレンスは「不在」であったかもしれませんが、ロレンス研究にも大きく関わる 20 世紀初頭のモダニズム雑誌をめぐる状況や、取り上げられた作家たちの「越境者としてのまなざし」への注目は、シンポジウムの聴衆にとって多くの気づきや視点、刺激を与えてくれるものでした。

言うまでもありませんが、研究発表、シンポジウムの各報告は、それぞれの論者の思いのこもった力作であり、数行をもって紹介しきれものでは到底ありません。近い将来、活字化されて再び今回の論考に出会える機会が来ることを願ってやみません。

シンポジウム終了後、プログラムに沿って「総会」を行ないました。その内容に関しては下に報告いたします。従来での「懇親会」は今年度は設定しませんでした。代わりに「交流会」を企画し、高田 英和氏の舵取りのもと、多くの参加者にマイクを回して、この間のコロナ禍での研究・教育状況、国際交流、今後の学会の在り方などなど、悩みも含め自由な発言をいただき、久々の対面での「交流」をはかりました。

研究発表やシンポジウムをはじめ、今年度大会の様子については、協会のホームページ「全国大会」→「54 回レポート」をご覧ください。当日の写真入りで報告が掲載されています。

次に、総会での審議および決定事項をご報告いたします。

1. 評議員の選出について

中国・四国・九州地区の評議員に関して、岡山 勇一先生の後任として、加藤 洋介先生が評議員として選出されました。合わせて、地区の代表を新井 英永先生にお願いすることも承認されました。

2. 2024 年度 第 55 回大会について

・開催校・日程について：

例年の開催時期（6 月）を念頭に、関西圏の大学での開催を検討する方針に関して承認されました。また、オンラインの活用に関しては、会場校の条件等の検討要因がありますが、引き続き活用していくこととなりました。合わせて、会場校の過度の負担にならないためにも、オンラインの活用はあくまでも補助的なものとすることも確認されました。

(大会後、ご相談・調整を行いまして、以下のような開催形式を予定しています。)

会場：甲南大学（神戸市）

日時：2024 年 6 月 22 日（土）・23 日（日）

会場校の岩井 学先生には大変お世話になります。

(また、総会でもご確認いただきましたように、大会に向けた準備状況いかによりましては、1日開催(22日・土曜日)の可能性がりますことをお含み置きください。)

3. 会計報告

会計の鳥飼 真人氏より、2022年度決算報告および2023年度予算案の報告・提案があり、会計監査報告の後、承認されました。

その他、報告等

1. 顧問の就任について

会則9条に則って、役員会にて、岡山 勇一先生、田部井 世志子先生の顧問への就任が了承されたことの報告がなされました。

2. 会員数について

庶務の上石田 麗子氏より報告があり、現在の会員数は92名です。

3. 研究助成について

・大会研究発表のための助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない会員に対して、本協会大会で研究発表(シンポジウム講師等の担当を含む)をする際の費用の一部を助成するための制度。<http://dhlsj.jp/dl/josei.pdf>

・和田静雄海外研究発表助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない若手会員に対して、海外の学会でD・H・ロレンスに関する研究発表を行う際の費用の一部を助成するための制度。<http://dhlsj.jp/society.html>

以上、ご報告いたします。

最後になりましたが、今年度の会場校としてお世話になりました鳥飼 真人先生に、この場を借りてお礼申し上げます。すばらしいキャンパスで、すばらしい教室・会場のご準備をいただきました。コロナ禍で幾度となく開催を見送ってきたにもかかわらず、この間、丁寧かつ辛抱強く大学との交渉にもあたっていただきました。ありがとうございました。

来年は神戸で多くの会員の皆様とお会いできることを楽しみにしております。

(付記：シンポジウム企画に関するお願い)

総会時に口頭で少しお伝えした内容ですが、来年度（以降も含めて）の討論企画（シンポジウム、ワークショップ等）に関して、ご応募、あるいはアイデアをお寄せください。個人の研究発表とは異なり、共同企画には、日程等の調整や打ち合わせなどで準備時間を要するのが通例です。発表・報告の希望のみならず、企画のアイデアもぜひお寄せください。固まり切れていない、検討途中の企画も歓迎です。今年の「ロレンスと雑誌メディア」関連にご関心の方など、第2弾の企画をお待ち申し上げます。10月末を目途に、事務局、あるいは会長までご一報願えればありがたく存じます。